

---

# とある科学の魔法論理

Syura

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の魔法論理

### 【Nコード】

N0112V

### 【作者名】

S y u r a

### 【あらすじ】

昔、魔法はない世界だった

そしてその未来

科学によって産み出された魔法に導かれ、1人の少年が旅にでる

不定期更新です

## 第一話 冒険の始まり（前書き）

シリアスムズい！

「あの、私の名前は…」

後で後で

「ひ、酷い…」

## 第一話 冒険の始まり

あるところに周りの学者からバカにされている学者がいました

その学者は、周りの罵声をまったく気にしない様子でした

あるいは本当に聞こえていなかったのかも知れません

その学者は魔法を作ろうとしました

それを周りの学者は不可能だ、と一蹴しましたが、学者は諦めませんでした

魔法を作ろうとして早くも五十年、学者は周りが馬鹿らしくなり、とある島の森で暮らしていました

ある日、学者はついに魔法を作ることに成功しましたが、それが世間に知れることはありませんでした

学者は、魔法を作り出しふと思ったのです

「これを使えば世界を手にするのも簡単だし、それをすれば作った意味がない

世間に公表し、世に私の名前が知れても戦争に使われだくじゃないか」

そう考えた学者は1人、森の中で、ひっそりと暮らし続けました  
その生涯が終わるまで

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「どうかのう?」

「いいんじゃないですか?  
なかなかおもしろいと思いますよ」

「そうかそうか  
よかったわい」

この人はニコじい  
この島の中で一番物知りらしい  
今のはニコじいな紙芝居で  
時々ニコじいは島の子供たちに紙芝居を作って呼んであげている  
正直面白いと思ったのは少ないですが、今回はニコじいの作った  
中では最高の出来でした

「実はのう  
これはわしの家に代々伝わる伝説なんじゃ  
わしはこの話が好きで  
この話を思い出すたびに眠れなくなったもんじゃ」

「なぜ今更その話を紙芝居に?」

「わしのじいさんが死んでからまったく聞いていなくてな  
この前森に行ったときに思い出したんじゃ」

「そうですか」

「森の中で古い家を見つけてのう  
その家がこの事を誰かに伝えて欲しそうな感じがしたんじゃよ」

なんともファンタジーな話である

実際魔物は火をはいたり、気が動いたり、砂が巨人になったりするけど、それはここ最近で

数年前までは魔物なんていなく

いきなり出てきて世界の半分は魔物だらけ

この島もこの村以外は魔物が住んでいて危ない

でもニコじいはずな魔物がこない場所を知っているようで、何度も森に行っているのにまったく魔物に遭遇した様子はない時々魔物なんじゃないかと疑いたくなる

実際既に150歳を超えていて村では魔物とかぬらりひょんとか呼ばれているらしい

本当に妖怪じみた人です

「さて、わしはこれを村の子供たちに見せに行くよ」

「はい、行つてらっしゃい」

森の家…

私は一度森の中に迷い込んだことがあつて

その時に家の中に入って、夜をすごした思い出がありますでもその後はいくら探しても見つかることはできませんでした家どころか人の作った物さえもみつきりませんでしたね

だから夢だったんだと思ってあきらめてはいますが  
家を見たというなら探しにいきたいんですが…  
いや

「行くとしますか」

すぐに準備をして家をでた

森について早一時間  
なにも見つからずに半ばあきらめていた

（やっぱりないか…  
戻るとするか…）

そこで気がついた

（来た道はどっちでしたっけ？）

完全に道に迷った  
幸いもしもの時のために食料と水は持ってきていたので二日ぐらい  
なら大丈夫だろう

（備えあれば憂いなし、本当だな）

そんな事を考えながら今日寝る場所を探し始めた

寝る場所を探し始めてしばらく経過した

持ってきていた時計は気づいたら壊れていて経過した時間がまったくわからなくなった

森は暗くなるのが早い

太陽が見えないのでいきなり暗くなる

（後十分ぐらいか…）

幸い少しは知識があるので空の色で大体の時間はわかる

あと少しで暗くなり始める

暗くなり始めたら一瞬で暗くなる

（ここにするか…）

木の実や骨がなく魔物などの生き物がいないであろう木の根元の空間を見つけた

剣術や武術の心得はあるが一応だ

（とりあえず火をつけるか…）

木の根の間には何もなかったので、天井が燃えないようにそういう液体を塗り、外から木の枝や木の葉、木の実などを集めてきて火をつけた

木の実が一番その地面に埋めて、しばらくすればはじけるようにした

こうすることで朝早めに起きることができその上にはたくさん木の枝や木の切れ端、木の葉を置いておいたので、五時間ぐらいは消えないし、木の実もはじけないう

木下にはもともと広いスペースがあったが少し掘って広げたのでかなり広い

この周辺の魔物は火を嫌う

なので入り口の近くで火をつけて

私は奥のほうで寝た

朝、ニコじいも心配しているだろうから家に帰ることにした

「さて、一応目印をつけていくか…」

木の陰で太陽の位置がわかるので方向はわかるが、念には念を、だ

私が住んでいる村はこの島の端、横向きの雫のような形をしていて、一番東、ちょうど雫のとがっている部分にある

目印は赤い布を木の枝に巻きつけた

「では行きますか！」

「おお！帰ってきたか！」

「心配をおかけしました

少し森の方へいつていたのですが迷ってしまつて」

「そうかそうか！」

まさか家を探しに行っていたのか？」

「はい、昔のことを思い出しまして」

確か5、6才ぐらいの頃だったはずだから、今16なので十年ほど前の話だ

「あれはやめたほうがええ」

「なぜです？」

「実はな、わしはこの島のことをよく知っている  
じやから島をよく歩き回るんじやが…」

ニコじいの顔が険しくなる

「この島は生きている」

「！！」

「そしてその元があの家なんじやろう  
あの家の周りはまったく変わらんがそのほかの場所はどんどん変わる  
あの家も周辺は変わらんが、移動しとる  
この前見たのもいつもの散歩道じゃ」

「動いている！？」

「ならなぜニコじいは迷わないんです！？」

「簡単じゃ

今までわし以外気づかんかったように、その変化は少しづつなんじや

よって毎日通っていれば、自然と道もわかるんじゃない、木に目印をつけておるからのう」

「そうなんですか」

「それに迷っても朝になれば自然と帰り道がわかる  
島の形は今まで少しも変わっておらん

わしは100年以上この島に住んでおるが、島の形は少しも変わっていないのじゃ」

なるほど、なら

「もう一度あの家を探してみることにします」

「!？」

やめておけとっておるじゃろ!」

「でも帰り道がわかれば問題はないですし、何より寝泊りする場所  
はもう決まっていますから」

その場所はもちろん昨日の木の根元  
途中から目印がなくなっただので色々工夫したので多分悪ガキには見  
つかってはいないはずだ

「……お前は昔から一度決めたら貫くやつじゃからのう  
まあ、気をつけろ」

「はい、行つてきます」

そして今回は5日は過ごせるぐらいの装備で家を出て行った

この前の木の下の空間に到着  
まったくずれていないところを見ると地面ごと移動していることが  
わかる

（常に移動してるってニコじいは言っていましたね  
なら木が地面と移動の差がないということは地面ごと、ということ  
で間違いはないでしょう）

とりあえず昨日と同じく  
液体を塗り

暗くなる前に色々集めることにしました

そしてそれを集めていると

「大きな木ですね」

大きな倒木を見つけた  
最近雨が降らなかったので乾いている  
これは燃やすのにちょうどよさそうですね

（ギギ）

お、重いですね…  
ですが！

（ズ、ズズズ）

動かせない重さではありません！

そのまま木の根元まで運んでいきました  
明日は筋肉痛確定ですね

今日の収穫は無し

また明日にかけますか

そう考えながら昨日と同じように眠った

朝起きると火は消えていました  
木の実がはじけた様子はなく、夜のうちに雨が降ったようでした

（少し寒いですね）

少し服が濡れていました  
しばらく火をつけて乾かしてから行きますか

大木は端だけを切って使っていたので中のほうは乾いていました  
服はすぐに乾いたので早速家を探し始めました

（やっぱりないですね）

いくら探しても見つかりませんね

（今日は島の反対にでも行ってみますか）

まだ時間があり、パンなどを持ってきていたので  
火がなくても食べられるため、今日は村の反対の方へ行ってみるこ  
とにしました

「ふうう…」

道のりは遠そうですね

と、思っていたら

「まさか100mほどで見つかるとは…」

家は見つけましたが何か納得がいきません  
私の覚悟を返してください

（とりあえず入りますか）

いくら悔やんでも何もないので入ることにします

中は意外ときれいでしたただ…

「なんで木の根っこがうごいてるんですかねえ？」

木の根が床から生えて動いていました

しかも

（ギョーン）

襲ってきました

「その程度なら！  
はっ！」

（ズバン）

護身用の剣なんですけど…  
ニコじいにもらったもので意外と切れ味がありますね…

「これなら…  
はああ！」

（ズバズバズバズバズバ）

簡単に切れるので全部切ってしまえますね  
硬さもすごいのでまったく刃こぼれしませんね

（キィイ…）

紙面が光りだした！？

（ドゴォー！）

地面から木が生えてきました

しかも

（ギィィ！）

生きてますね

敵意ありとみなします

「ミゲア！」

喋れるんですね…

左右から根っこが飛んで来てますが

「はぁ！」

（ズバン）

一瞬で切り落とす

さらに

（タン）

懐から一閃

本体にダメージが通った

「ミゲア！」

もぐりましたか…

なにかゲームのようですね

（ズボオ）

またたくさん根っこが出てきましたね  
これを斬ればまたでてくるんでしょうか？

（ズバン）

スピードには自信があるのですぐに切れました

「ミゲア！」

やっぱりできましたね

（ブン）

今度は上からも来ましたが…

後ろに避け一閃

（スババン）

全て切り落とし相手に突っ込む

「ミゲア！」

それしかいえないんでしょうか？

突っ込んでいる私めがけてたくさんの根っこが迫ってくる、が

「その程度！」

全て切り伏せます

そして一閃

（ドス）

相手に剣が突き刺さる

（グッ）

抜けない…  
でも！

「おおおお！」

抜けないなら切り裂くまで！

（バキィ！）

斬れたというよりは割れた

その瞬間地面の光は消えて木の魔物は消えた

そしてさらに

（ゴゴゴォ）

下に階段が…

ここは…

「もちろん入りましょう」

下に下りるとそこにはたくさんの本がありました

訂正

先が見えないほどの本棚がありました

「ここはなんでしょうか？」

「お客様ですか？」

！？

「入り口の魔物を倒したのは」

「あの、あなたは…」

「私はM D 2000

ミディーとお呼びください」

「ところでここは…」

「ここは天才学者、エイガン・ミニオン博士の研究所です  
ここに存在する書類は全て魔法の資料となっております」

「魔法？」

「そんなものが存在するんですか？」

「それになぜあなたが私にそんなことを？」

「私は博士が死ぬ前にこう言われました

この研究所の入り口の魔物を倒したものにあい、善とみなせば全てを話せ、悪とみなせば記憶を消し、遠くへ転送しろ、と

そして魔法は世界で博士が一番最初に発見したのですが

世界各地に点在する私のコピーたちからの情報によると、今世界中で魔法は存在するようです

それらは生活から戦争など、色々なことに活用されていて、もはやとめることはできません」

「少しの質問しかしていないのに知りたいであろう事を殆ど教えてくれたね…」

「恐れ入ります」

これはほめてるうちに入ってるのかな？

「ところでその魔法って言うのはどういう原理なんですか？」

「原理さえわかれば簡単です

人にはそれぞれ固有の魔力があります

博士はそれらがどのような種類があるのか調べ、それらにあった魔法を研究していました

その結果魔力には幾つか種類があり、その人固有のものや、幾つか決まった自然の力をもった魔力、はたまたその二つを扱うことができるものです」

また難しそうな…  
嫌いではないですけどね

「では今からあなたの魔力の特徴を見て、その後あなたの素質を目覚めさせます」

要するに下準備ですね

「わかりました

あなたはこれといってかたよりはなく、全てにおいて力を引き出すことができます

よく言えば万能

悪く言えば器用貧乏です」

それは悪くいつてるのでしょうか？

「ところで今まで魔法なんて知らなかったんですけど、世界では一般的とはどういうことですか？」

「この島は外の世界からは交流をしていませんので、まったく外の世界の情報が入ってこないんだと思います」

たしかにこの島の集落はあの村だけで、さらに川が近くにあり、海に面していて、森には木の実や果物がたくさん成っている

自給率は実に120%

時々くる漁師さんたちに分けたりもしている

でもその漁師さんたちも近くにある島の人だが、その島も外交はま

「まったく無いらしい」

「なる程」

「ところで魔法の理論がまったくわからないのですが？」

「さつきも言いましたが魔力を使うんです」

「例えたとすれば魔法で火を起こすとすれば、」

「魔力は燃料」

「そして魔法陣が着火用の火花みたいなものです」

「魔法陣？」

「はい、魔法陣はそれぞれ模様は違い、それぞれ違った効果を持っています」

「たとえばこれ」

「そういつて三角を円で囲った絵が書いてある紙を取り出した」

「これに魔力を流すと（ボツ）燃えます」

「三角は炎や火を現すマークです」

「そして円は魔力をそのものに集中することを示します」

「このようにマークの種類、場所によって効果や形は変わりますが威力は変わりません」

「威力をあぐるにはどうするんですか？」

「威力を上げるにはたくさんの魔力を流せばいいんです」

「そうすることによって燃料を増やすことに繋がりますから」

「なる程」

「あと、稀に魔力で魔法陣を書くことが出来る特殊な魔力を持つ人がいますが、あなたはそれです」

「要するに魔法陣を一张张を取り出す手間が省けるんですね？」

「そういうことです」

慣れれば書かなくとも放出して魔法陣を作ることができるようになります

がんばってくださいね」

「わかりました」

「ではまずこちらから」

この日から数日

食料が尽きるまで魔法を覚え、練習し、ついに魔力を放出するだけで魔法陣を作ることができるようになった

その時に一旦家に帰り

ニコじいにまた探してくると告げ

また魔法の練習と習得の日々が始まった

## 第一話 冒険の始まり（後書き）

主人公に名前はまだない！

「酷いですよ！」

仕方がないじゃん

思いつかないんだから  
次回を待て！

「  
うう  
…」

## 第二話 笑（前書き）

シリアスですか？

すいません

壊しちゃいました

次話から精進します！

## 第二話 笑

魔法の練習と習得の日々

ここにある魔法の殆どは覚えることができた

「お疲れ様ですマリク様」

「ありがとうございます」

マリクとうのは私の名前です

ここにいる間に色々ありまして、ニコじいに喋り方が変わったと言われました

そこまで変わってはいないと思うんですけどね？

「マリク様、今日はどうなさいますか？」

「そうだな」

今日は召喚魔法にしよう」

「では書類をお持ちします」

「ありがとうございます」

待ってる間に朝食を食べた

今日のメニューはサンドイッチです

「お持ちしました」

ここの広さはえげつない

視力を上げる魔法を使って廊下の先を見てみたが、壁が見えなかった  
ミディーに聞いた話だと地下もあるらしい

「え〜っと

うわ〜やっぱり難しいね」

円のふちの方に文字が書いてあり  
中心に三角が書いてあります

「召喚魔法の魔法陣の特徴は、この部分です」

「なるほど、このふちの文字ですね」

トータルと書いてありますね

「ここには召喚するものの名前が書いてあり、円の中にはそれを象  
徴するマークがあります」

「では早速」

「無理です」

「無理とは？」

魔法陣ならこれと同じものを作ればいいわけですし、問題はないは  
ずですが

「召喚魔法は召喚する対象と契約する必要があります」

「契約ですか？」

どうすれば？」

「簡単です

対象に力量を見せるのです

簡単に言いますと倒せばいいんです

そして対象に契約用の魔法を当てるんです」

要するに捕獲のようなものですか…

「大体はわかりました

要するにとどめはささずに捕獲するようなものですね」

「そういうことです

では、私が博士に契約させてもらった魔物と契約してもらいます」

まずは肩慣らしってわけですね

「では外へ行きましょう」

と、ということなのですが…

「少しでかすぎませんか？」

「そうですか？」

目の前には黒くて、大きな木が生えているんです  
大きさは約30m、そして…

（ビシィ）

「あぶなっ!？」

この前同様動いてます  
今回は枝も

「では、がんばってください」

「えっ!?!ちよっ!?!まっ!」

ミディーは結界を張り、その外にいた

「結界を張りました

これで音や姿は外からは見えないはずで

私は魔法で見ることができますので、安心してください」

それ以前になぜこんなに大きな木が最初の相手なんですかね？

(ビュビュビュビュビュビュビュビュビュ)

葉っぱを飛ばしてきましたね

「よっ」

避けれましたけど…

(ザクザクザクザクザク)

地面に深く刺さってますね…

当たったらただではすまないでしょうね…

「ミギヤア！」

泣き声と共に周りが暗くなる  
そして上を見ると

（ズオオオオ）

大量の木の枝＆根っこがこちらに迫ってきていました

「まったく、化け物みたいですね…」

しかし、私も魔法は使えるんですよ？

『ファイアー・トルネード』！」

この魔法は炎の中級魔法で、炎を竜巻のように回転させながら打ち出す技です

非常に貫通能力が高く、相手が木なので威力も高いでしょう

（ズドオオオ）

「ミギヤア！？」

（ズオオオオオ！）

「ミギヤアアアアアアアア！！」

どうやらこの根っこや枝の壁を燃やそうとしたら、本体まで届いたようですね

今度から加減することも練習しましょう

「ああ、まずいますい

このままでは消えてしまう  
『ウォーター・プリズン』」

これは敵を水の中に閉じ込め、窒息死させる技なのですが  
今回は消火に使いました

「どうやらまだ生きてはいるようですね  
『フレンズ』」

この魔法は魔物を仲間にする事ができる魔法なのですが、魔法の  
名前がフレンズなんですよね…  
人前では少し使いたくなくなる名前ですね  
名前はいいなくてもいいんですけど…

相手は空中に作り出された魔法陣に吸い込まれていった

「お疲れ様です」

「ありがとう」

ミディーがタオルを持ってきてくれた  
さらに飲み物も

「では次の契約を」

「もうやるんですか？」

「はい、では今から30分後  
準備をしてここへ来てください」

何の準備なのかは聞いていないため  
幾つかの魔法陣を書いた本と食料に水、さらに結界を張るための道具をかばんに入れた

「準備はいいですか？」

「いいですけどその前に」

「なんですか？」

なんですかじゃないですよ…

「何をやるんですか？」

「そういえばいつてませんでしたね

マリク様がここへ来る前に、あちらの山に光が下りてきました

あれは魔法で光っていたので、他の方には見えなかったと思います」

「もしかして…」

「はい、あれからは生体反応が見られましたので  
マリク様にはあれと契約してもらいます」

なぜ得体の知れない物を修行の相手にしなければいけないんです  
しょうか？

「ものすごくハードルが高いような気がするんですが…」

「仕方ありませんよ

さっきの魔物以外には私は契約していませんし

この森にはあの魔物より強い魔物はそういません」

「だからあれに行けと？」

ハードルが高いですって

「ではいつてらっしゃいませ  
途中までは転送しますから」

え？

「いきますよ」

「ちよつとまつ……！」

「転送！」

語武運を祈ります！」

「ええ……！？」

思わず品の無い叫びをしてしまいました  
が仕方ないと思います！

転送で飛ばされついた場所は

「なぜ岩場？」

山の岩場だった  
たしかにミディーは山を指差していた  
しかし指差していた山は

「西に約2kmの場所にあるんですよ…」

とりあえず向かうとしますか…

途中魔物に襲われましたが木の魔物にかたづけさせました

「よくやりましたね  
え」と…」

「ミギヤア」

枝で文字を作って教えてくれました  
起用ですねえ

「え」と…  
ウツディ？」

「ミギヤア！」

どうやらあっていたようですね  
無事に山まで来ましたし

「登るとしますか」

「ミギヤ！」

「ああ、休んでいいですよ」

「ミギヤ」

よくわからない会話と、鳴き声でウツディは消えた  
性格には魔法陣の中に入った

「ふう…」

登りながら魔法陣の勉強でもしますか…」

今回持ってきた魔法は、まだ覚えていない捕獲魔法用の魔法陣が載  
っている本で

そのまま使うこともできるんですが、力が弱くなるんですよ  
捕獲用魔法陣は大きさが大事ですからね

「ふむ…  
なるほど…」

捕獲用魔法陣は、相手の種族によって捕獲しやすい魔法陣が違うよ  
うで

あいてが魔法陣を破ってしまうと捕獲はできないようですね

「なるほど  
興味深い」

（ゴソゴソ）

「ん？」

背負っていたリュックから物音が…

おそらくこのあたりに住んでいるラットでしょう

一応魔物なんですが、見た目がかわいく、別段強くないので基本的  
にペットにされたりしてます

「ラットですか…」

トラウマではないですよ？

むしろ大好きなんです

「え」

たしかラットは魔獣系の魔物だったはず…

あつたこれですね

本の目次から魔獣系の魔物に効きやすい魔法陣を見つけて  
リュックの中からラットを出した

「キュッ！」

ソーセージを持ってますね

「確か捕獲するときは相手を弱らせなくちゃいけないんですが…」

「キュッ？」

無理ですね

「相手が抵抗しなければいいわけですし  
一度やってみますか」

本を見ながら魔法陣を作り、そこに魔力を流し込む

（キィィィィ）

「捕獲！」

「キュ！」

あっさり吸い込まれていった

「では早速」

ラットを召喚するための魔法陣を作り出してそこに魔力を流し込む

「でておいで」

「キュ！」

かわいい…  
はっ！

和んでいる場合ではありませんでした

「君に名前をつけてもいいですか？」

「キュッ！」

どちらにいいようですね

「では…」

キュッポはどうですか？」

「キュ！」

どうやら気に入ってくれたようですね

「キュツキュ！」

かわいい…

小動物は大好きです

「では登りますか

あ、戻っててくださいね」

「キュツ！」

そっいつてキュツポは戻っていった

「休むときにだして癒されることにしましょう」

（30分後）

「さて休みますか…  
出ておいで」

「「「「キューーーー！！」「」「」

癒される…

え？なんで多いか？

途中で見つけたので捕獲しました  
だってかわいいし、よってきたんですもん

「ああ…癒される…」

このまま死んでもいいです…

（なにしてるんですか）

「うわっ!？」

びっくりした…

（何をラットに囲まれてニヤニヤしてるんですか）

いきなり魔法で通信してきてなんですか

ついでにこの魔法はテレパスという魔法で

電波を飛ばして映像と音声を飛ばしているらしいです

他の島なら普通らしいんですけど…

ついでに5個目ぐらいに覚えさせられました

緊急時に使えるらしいです

「だってかわいくないですか？」

（確かに可愛い…それより）

ごまかしましたね

（はやく行ってくださいよ？

こっちは準備してるので）

準備がいいですね？

すごくできる人だと思います

「わかりましたよ」

（では）

消えましたね

「「「キュー？」「」「」

「ああ、戻ってください」

「「「キュー！」「」「」

癒されますね…

戻っていきました

では登りますか！

（数時間後）

頂上に着きましたね

「ミッションコンプリートしました！」

（頭を打ったんですか？）

なぜでしょうか？

「いや、頂上に着きましたよ？」

（目的が違います）

違いましたっけ？

（ここに落ちた生命体の捕獲が目的でしょう）

そういえばそうでしたね

「忘れてました」

（ファイア

しっかりしてくださいよ）

どうやらこの通信は魔法も飛ばすことができるようです  
髪がチリチリになりました

「では早速…（ザシュ）！？」

（あれはフェンリルですね）

え？

それって確か…

「伝説の魔獣…」

（ですね）

やっぱりとんでもないような物でしたね  
しかも怖いですよ  
まったく見えませんでしたもん

今は目の前にいます…け…ど…

(どしました?)

「かわいい…」

(え?)

小動物も好きですが  
一番好きなのは狼なんですよ  
かわいくないですか?

「……(ジュルリ)…」

「びくっ!?!」

どうやらおびえていますね

「何におびえているんでしょう?」

(100%マリク様のせいですね)

なぜでしょう?

あ、よだれがたれてましたね

「では、やりますか…!」

「!(ザッ)」

相手も臨戦態勢ですね

ですが…

ぜひともモフモフさせてもらいたい

「がぁぁー!!」

やっぱり見えませんね…

ですが！

「そこだあ！

フレイム！」

(ドウウ！)

「！？キャイン！」

当たりましたね

フレイムは炎を使う魔法ですが、対象を燃やすのではなく

対象に触れた瞬間爆風を出して吹き飛ばす魔法です

なので毛並みは乱れても毛が燃えることは無いですよ！

「マジックプリズン！」

「！？」

今のは魔法ではなく

対象の周りに魔法陣を大量に出現させる荒業です

対象が魔法陣に閉じ込められているようになるのでこの名前にしました

ついでに全て魔獣系に効く捕獲用魔法陣です

「フルバースト！」

全ての魔法陣を発動

そして全魔力を持つて捕獲する

ついでに大量に出したのは念のためです

一応抗うために暴れなければいけないので

スタミナを奪いつつ捕獲します

「ガアアアアアア！」

抗ってはいますが…

無駄ですよ？

全魔力注ぎましたからね

え？なぜずっと頭の中だけか？

それは…

「う…あ…」

魔力の消費のしすぎで疲れたからです

でも大丈夫です

ラットを召喚するための魔力はギリギリ残してありますから

「ガアアアアアア！」（シュン）

どうやら捕獲できたようですね

（お疲れ様です）

「ああ、いまから回復して戻るよ」

（その必要はありません）

え？

（私が転移させます）

「ちょッ！それはまゝ（転送！）Eeeeeeeee!？」

オワタ

## 第二話 笑（後書き）

どうですか？

次からがんばりますが

どうやってもシリアスでははじめられそうに無い展開に……でも気にしたら負けです

### 第三話 海岸の激闘（前書き）

タイトル通りです。はい

今回のテーマを上げるとしたら絆ですかね？  
そんな話になりました

そして遅くなって申し訳ない！

### 第三話 海岸の激闘

ミディーの転移で帰ってきてから数日  
私は着地時の衝撃で気絶していました

「うん……うん？」

そして今日目を覚ましました

「マリク様、お目覚めになりましたか？」

「ええ、何とか」

まだ頭が痛いですが……  
最後に見た光景が迫りくる地面でしたからね  
頭から落ちました

「マリク様、今日のトレーニングは？」

「やめておきます  
まだ頭が痛いので」

「かしこまりました」

ふう……

「召喚  
ラット」

「「「「「キューー!!」「」「」「」

かわいい……

さて、今日はまだ休むとしましょう

魔力は回復に回してできる限り早めに回復しなければ……

あのフェンリルはなついてくれないので早く回復して遊んで懷いて欲しいですからね

伝説の魔獣ですからかなりの戦力にもなりますし

「ふう……

明日には回復できるでしょうか？」

朝

起きると頭の痛みは消えていました

魔力を回復に回したので早かったのでしょうか？

「マリク様、おはようございます

朝食はここにおきますね」

「ありがとうございます」

「マリク様、今日はどうなさいますか？」

「それなんだけど、今日はフェンリルについて調べたいんだ」

何をすればなついてもらえるのか調べたいですしね

「かしこまりました」

魔獣、神獣、フェンリルに関する資料を持ってまいります」

とりあえず持ってきてもらった朝食を食べますか

「持ってまいりました」

ミディーが持ってきたのは数百冊の本（一冊の厚さは辞書級）でした  
今日中に読み終われるでしょうか？

「多いですね……」

「マリク様、こちらを」

（視力強化魔法陣）

そう書いてある本を渡されました

「これは？」

「この本にはあらゆる視力を上げることができる魔法陣が載っています」

これを使えば通常の二倍の速さで読み上げることができるかと」

気が利きますね

「ありがとうございます」

「では」

ミディーは奥へ消えていった  
なんでも通信用の部屋があるそうで  
そこで世界から情報を得ているらしい

「さて、がんばって読みますか……」

「ふむ……なるほど」

読み始めて半日

3分の1程読み終わり  
わかったことがあった

フェンリルは召喚獣の中でもトップクラスの实力を持ち  
成獣になると20mを越すものもいるらしい  
フェンリルは狼のように集団で行動していて  
大きな群れになるとバハムートより手ごわいらしい

バハムートとは召喚獣の中でもトップクラスの召喚獣で、最強だとも  
言われています

フェンリルは实力を認めた相手の命令は従い  
その忠実さから、昔から王家の召喚獣として活躍していたらしいです  
要するに

「实力を見せれば従ってくれる

と、いうことですか……」

にしても魔法が無い頃に召喚獣がいたんでしょうか？

「ミディー」

「はい、マリク様」

「実力を証明すれば認めてくれるようですが  
どうすればいいと思いますか？」

「そうですね……」

いずれは認めてくれると思いますが  
早いのは共闘ですかね」

「なるほど……」

ところでこの書類は最初から？」

「いいえ」

後から世界中からえた情報で私が製作したものです  
私にもデータ要領がありますから」

そうですか……」

まあそうですね

魔法が完成した当初から王家が召喚獣を扱っているはずは無いですし

「そうですね」

最近ですか？」

「はい、マリク様が来る30年程前です」

私がここにきたのはその73分の1程前ですけどね

「でも

私にとつてはマリク様が来るまでの期間よりマリク様が着てからの期間のほうが長く感じます」

「それはうれしいですね」

孤独はいくら機械といえどAIで感じるのでしょうか  
さびしい思いをしていたんですね……

「ミディー」

「はい？」

なら

「これからよろしくお願いします」

「はい、こちらこそ」

できる限り一緒に住めるようにしましょう  
もう寂しい思いをさせないためにも

「私はもう少し情報を集めてきますね」

「わかりました

私は続きを読んでいます」

さて、他に何かわかるでしょうか？

本がボロボロになって読めなくならないように同じ内容のものがあつたりしますからね

完全に同じものが無いので全てに目を通さなくては……

なるほど……

そういうことですか……

「フェンリルは子供と共闘し、力量を測った上で群れの一員として認める……

ということとは共に戦うということになりますがそれだとこの島の魔物は力不足……

島の外に出なくてはいけなくなりますがそれだとミディーが1人に……」

ふむ、どうでしょうか？

1、フェンリルと仲良くなることはあきらめる

これはできれば選択したくないですね  
大きな戦力が欠けたままになりますし……

2、ミディーを残して旅に出る

これもダメ

ついさっきの誓いがありますしね……

3、この島にいる魔物を片っ端から倒す

これがいのような気はしますが、フェンリルと私だとやはり敵は力量不足……

あまり意味を成さない気がしますね  
これもダメでしょうか？

「いい案が浮かびませんね……」

「どうされましたか？」

ミディーですか……

「フェンリルは共闘したうえで認めてくれると、書いていたので魔物を倒しにいかうかとおもっているのですが……」

この島だと敵は力量不足

この島以外だと離れすぎていてミディーが一人ぼっち……  
どうすればいいか迷っていたんです」

「私のことは気にしなくても「気にしますよ」「え？」」

「いくらなんでも今まで1人だったんですから一緒にいますよ  
これからは私達で暮らしていきましょう」

一人は寂しいでしょ？」

「それ自分で言っけて恥ずかしくないんですか？」

「……………」

なにやら自分で言っけて恥ずかしくなってきました  
少し後悔してます

「まあ気にしてくれるのは嬉しいことですね  
お礼にいい情報がありますよ?」

「なんですか?」

「この島の海岸に洞窟があり、その奥にはクラーケンが住み着いているといわれています」

クラーケン

海の悪魔とも呼ばれ漁師から恐れられている存在  
見た目はイカですが悪魔の一種だそうで、大きさが半端ないとか……

「それはいい情報ですね

早速フェンリルと行ってきます

ミディーもいきませんか?」

「私は塩水が苦手なので遠慮しておきます」

そういえば機械でしたね……

見た目が人とそこまで変わらないので忘れていましたよ……

ついでに金髪のロングに緑色の目、服はオレンジが基本ですね  
ロボットだとは思えないぐらい美人です

「では行つてきます」

「はい、モニタで呼び出してくればいつでも情報はお送りします  
からね」

「心強いですね」

そう会話を交わし、フェンリルを召喚してから海岸に向かった  
少し抵抗しましたが強制的に連れて行きました

「ここですかね？」

海岸につくとまさにといった感じの洞窟がありました

「さっそく入りますか  
行きますよフェンリル」

「貴様に指図される覚えはない！」

しゃべれたんですね……  
感激です…じゃなくてびつくりです

「とにかく行きますよ」

「離せー!!」

ついでに首輪とロープを付けてます  
逃げられてもあれですしね

なかは少し肌寒く、もう少し厚着をしてくるべきだったと後悔しま

した

「奥はもつと寒いんでしょうか？」

ファイアで耐えればいいですけど……

「人間はこの程度で寒がるのか？  
貧弱だな」

洞窟の中は両端に足場があり、真ん中に海とつながり洞窟の奥へと続く水路があります

底が見えない程の深さでクラークンがいても気づかないくらいの深さ

「いきなり襲われたりとかもあるかもしれませんがね」

さらに奥へ入っていく

しばらく進んだところでこの洞窟のおかしなところに気がついた

「おかしいですね……」

「何がだ？」

「ここまできて魔物どころか生き物すら見かけていません  
見かけたのは千切られた海藻とまるで切られたかのようにえぐられた岩や壁だけ……」

生き物の気配は無く、海藻は噛り付かれたかのように千切られていて壁には硬い何かで切りつけたような跡が残っている

「ふん、それがどうした？」

クラーケンがやったのだろう」

そうなのかも知れません

しかしクラーケンはイカのような悪魔

このように切られた様な跡を残せるでしょうか？

「早く終わらせて帰るぞ」

「ま、待ってください！」

1人だと危ないというのに……

(ボゴン)

その時海面に空気が上がってきました

「！、フェンリル！」

「わかつている！」

その直後、海面から一本の太い触手が飛び出してきました

「！（ゴッ）ぐっ！」

なんとかガードしましたが、骨にひびが入ったかもしれませんね

「リカバー！」

上級の回復魔法ですが、時間が無いので応急処置程度にしかありませんね

「あの程度も避けられないのか？  
なら下がっている、足手まといだ」

確かに今は足手まといでしょうね

腕は骨にヒビ、足はくじいてしまいましたから

「じゃあお言葉に甘えて、お願いします」

（ビュッ）

もう一度触手が襲ってくる

「その程度」（ダッ）

フェンリルが消えた！？  
いや

（ビュビュビュビュビュビュビュ）

すごい速さでそこら中を跳び回っているようですね

薄暗くて見え辛いですが何とか見える明るさなのでギリギリ見えます

（ズッ）

フェンリルの動きが止まったとき触手は切りキズだらけになりすで  
にボロボロ

（ザバァ）

そして水面からクラーケンの本体が姿を現し

（ダッ）

フェンリルはもう一度すごい速さで跳び回り始めました

「腕の回復は、……済みましたね  
フェンリル！こっちに！」

（ズガッ）

「なんだ！」

戻って来ましたね

にしてもあの速度から止まったので地面が少し削れてるんですが……

「ミニボム！」

一瞬で魔法陣を作り、小さな爆弾を天井に向かって打ち出す  
即興なので一つ一つの威力は小さいですがね

「ファイアーボール！」

そのうち一つに火炎球を打ち出し引火させる

（ボガァ！）

爆発音と共に天井が崩れ落ち、クラーケンの上に降り注いだ

「キュアアアアアア！」

ん？

(トトトトトトトトトトトト)

崩れた天井はクラーケンを押しつぶし海底へと沈んでいった

「弱かったな、帰るぞ」

「いや、待ってください」

「なんだ」

なんでしょうか……この違和感……

クラーケンはたしか……

(カァッ)

クラーケンの特徴を思い出そうとしていると洞窟の奥から激しい炎が迫ってくるのが見えました

「フェンリル！」

「わかっている！」

「「逃げますよ！（るぞ！）」」

私は足に身体強化魔法をかけ、フェンリルは足を強化した私より早く洞窟の入り口まで全力で走り入り口に到達したと同時によこに跳んで避けた

その瞬間

（ゴオオオオオオオウ！）

洞窟から炎が飛び出しました

「海岸の巨大洞窟、激しい炎……まさか！」

頭の中に浮かんだのはクラーケンを超える海の盗賊

（ヌッ）

洞窟から巨大なハサミが姿を現す

「雑食とされるクラブ系の最上位種、ブラック・クラブ……」

（ギチギチギチ……）

現れたのは全身が棘で覆われていて真っ黒な巨大蟹

ブラック・クラブはクラブ系上位種、パワー・クラブの突然変異種  
その固体の大きさはゆうにクラーケンを超え、そのハサミはダイヤ  
をも砕くといわれている

「なるほど、さっきの違和感はこれですか……」

「なんだ！？」

先ほどの違和感の正体……

それは

「クラークの触手の数です

クラークの触手の数は2本のはず

なのに襲ってきたのは1本、このブラック・クラブが斬っていたんですね」

だとするとクラークより圧倒的に強い

「これはまずいですねえ」

クラークよりかなり強いとなると……  
厳しいですかね？

「逃げるぞ！」

「なぜです？」

フェンリルが逃げる体制になりながら言う

「勝てるはずが無い！」

「大丈夫ですよ」

普通に考えれば勝てそうにはありませんが……

「2人なら勝てます」

「バカか！？勝てるはずが無いだろう！」

すでに心が負けてますね……

「まだやつても見ないであきらめるんですか？  
なら足手まといです。先に帰っていてください」

先ほど言われた言葉を言い返す

「それに……そんなに逃げ腰の狼、邪魔なだけです  
そんな狼の手助けなど必要ありません」

さて、フェンリルはどう反応するか……  
予想だと……

「いい度胸だ……」

プライドが高いフェンリルは

「我等フェンリルの力！  
貴様に見せてやる！」

プライドを守る為に戦う

「うん、やはりその顔が一番いいですね  
逃げ腰になっているといい顔が台無しですよ？」

「ふん、うるさいぞ、集中しろ」

「そうですね」

さて、たしか炎の弱点は水

水はありますが水魔法はあまり覚えていないんですね……

（ギチギチギチ……）

ブラック・クラブは炎を

口から吐きながら素早い動きで攻撃しているフェンリルをハサミで潰そうとしている

「私もいきますか……」

そう思い魔法陣を書こうとしたとき

（マリク様、ブラック・クラブが出現する恐れが……）

ミディーから通信が入りモニターが開かれ、目の前の光景をみてミディーは言葉を失う

「残念ですがすでに出現しています  
どうすればいいですか？」

（まさかやるきですか？）

それを聞きますか？

「もちろん、フェンリルに認めてもらうためも」

（はぁ……わかりました。私がブラック・クラブの情報を探します  
のでその間耐えてください）

少しきついですが……

「わかりました。早くしてくださいよ?」

(あたりまえです)

そこで通信が切れる

「フェンリル、ミディーが何かつかむまで耐えますよ!」

「無論そのつもりだ!」

すこし仲良くなれた気がします

(ブン)

「おっと、危ない」

巨大なハサミをギリギリで避ける

他のほうに意識をやってる暇はありませんね

「なにをしている!」

集中しろ!」

「無論そのつもりですよ!  
ウォーター・アロー!」

海の水を使い矢を作り出し、ブラック・クラブに向けて大量に打ち出す

（ガガガガガガ）

直撃

しかし

（ギチギチギチ……）

あまり堪えていないように見えますね……

（ドガガガガガ）

あの巨大なハサミで何回も殴ってくる  
まあ、避けてますが

ぜんぜん堪えていない証拠ですね

「なにが弱点なんでしょうか？」

とりあえず色々試してみましよう

「ウォーター・アロー！」

まずは目

（ガガガガ）

（ギチギチギチ……）

平気そうですね

次は関節

（ガガガガガ）

（ギチギチギチ……）

（ブン）

「よっ」

ハサミはかるうじて避けれますが攻撃が通じていませんね……  
属性がダメなんでしょうか？  
水だと思ったんですが……

「ファイアーボール！」

ものは試しと炎の魔法を打ち出す

（ドガア）

（ギチギチ）

ダメですね

むしろ元気になりました

予想通りではありませんが……

水属性なら属性の相性は正しいはずなんですが……

（マリク様）

「早かったですね、ミディー」

（ブラック・クラブは見た目通り炎属性で普通の弱点は水属性なんですが……ブラック・クラブは特殊みたいで……）

「特殊？」

（はい、弱点は木の弱点のはずの氷です  
どうやら急激に冷やすことによって甲羅が脆くなるようです）

以外ですね……

でも一応使えますから試してみますか

「アイス・アロー！」

また海の水を使って矢を作り  
全体的に撃ち込む

（ガガガガガガガ）

（ギ、ギチギ、ギチ……）

効果ありですね

口から出ている炎も弱弱しくなってきました

（ガガガガガガガガ）

ハサミを避けながら次々と打ち込んでいく  
疲れますが……

避けるの、意外ときついんですよ？

「貴様だけにいいところを持って生かせはしない！」

「フェンリル！？」

（ビュッビュッビュッ）

すごいスピードで跳び回り相手の注意を引きこつちに注意が向けば攻撃して意識を逸らすしかも一撃一撃が重く、ブラック・クラブは一々グラついてます

さすがは伝説の魔獣ですね  
戦闘に慣れている

「フェンリル！」

「任せろ！」

まだ名前を呼んだだけなんですけど……  
伝わったんですかね？

「ガアアアアアアア！！」

（ガン！ガガン！）

フェンリルは攻撃する頻度を増やし、あいての注意を常に引き続けている

どうやら伝わっていたようですね

「はあああ……！」

フェンリルが気を引いてくれているうちに魔力を練り上げ魔法陣を書き始める

（ギ、ギチギチ……）

気づかれた！？

「くっ！おい、逃げろ！」

（グッ）

ブラック・クラブはハサミを振り上げ

（ブン！）

それを思いつき振り下ろす

「避ける！」

フェンリルは叫ぶが私の居る位置からは避けられないしかし！

「アイス・レーザー！」

寸前で冷機のレーザーを放ち、ハサミを押し返し、ブラック・クラブごと吹き飛ばす！

「フェンリル！」

「任せておけ！」

近寄ってきたフェンリルに身体強化魔法をかける

（ガッ！）

フェンリルは仰向けに吹き飛んでいくブラック・クラブに追いつき

「ガアアアア！！」

渾身の一撃をブラック・クラブの腹部に叩き込んだ

（ズガアアアアン！）

すさまじい音と共にブラック・クラブは地面にたたきつけられ

「オオオオオオオオン！」

フェンリルの勝利の雄たけびが海岸に響いた

「フェンリル」

「ふん」

2人で目を合わせ

無言でミディーの待つ家へと戻っていった

### 第三話 海岸の激闘（後書き）

どうでしょうか？

がんばってシリ阿斯にしたつもりなんです……  
前回は前回なんで完璧には無理でした……

「今度からはちゃんとしてくださいよ？」

はい、肝に銘じます……

#### 第四話 大切なもの、そして旅立ち（前書き）

今回は泣ける……かも？

すいません、勢いで書いたのでよく覚えてないんです……

今回はいつもより文字数は少ないですが、まあがんばりました。かね？w

ではどうぞ

#### 第四話 大切なもの、そして旅立ち

海岸でブラック・クラブを倒して数日

フェンリルとは仲良くなり、今ではフェンリルと狩りをするのが日課になっている

「ただいまミディー」

「今戻った」

「お帰りなさい

夕飯はできてますよ」

こんな感じで家族みたいに暮らしてます

「今日はフェンリルが多く倒したんですよ」

「そうなんですか、それはすごいですね」

「ふん、貴様などに遅れをとるか」

「いつも私より少ないですよ？」

「う、うるさい！」

「「ははははは！」」

こんな感じで暮らしている

フェンリルはよく喋ってくれるようになったし、仲間とも認めてく

れているようだ

「じゃあ私はもう寝ますね」

「なら俺も戻ろう」

「ではおやすみなさい」

そうしていつものように別れ  
眠りにつく

そう、これが当たり前  
今の当たり前

明日はいつものどつりの朝がきて、いつものようにミディーの作った  
朝食を食べ、フェンリルと狩りに出かけ、夕飯をたべ、眠りにつく

はずだった

「こ、これは……？」

朝起きてすぐ異変に気づいた

いつもならミディーがすぐに部屋に朝食を届けにくる

しかし今日は違った

ミディーがこない

そして自分の部屋から出てみた

そこに広がっていたのは今見ている光景

「なぜこうなっているんでしょうか……？」

倒れた本棚、破られている本、そして1つの鉄の塊  
いや、壊されたミディーがそこにあった

「なんでミディーが……？  
なぜ？どうして？」

しばらく状況がつかめず、夢だと思った、夢であって欲しかった

「まさか……なにものかの襲撃？」

その仮定はすぐに確証へと変わった

「おい、人がいるぜ？」

「本当だな！こいつなら何か知ってるんじゃないか？  
ロスト・マジック  
古代の魔法について！」

そこに居たのは鎧を着た人  
その手には槍が握られており、鎧と槍には紋章が書いてある  
その紋章は

「まあ、聞いたら即殺すけどな！」

「王の命令で！」

王国の紋章だった

「お前らが……これをしたのか……」

「あん？だつたらなんだってんだ！」

だつたらなんだ……？

「そんな鉄くずと紙切れごときで！」

鉄くずと紙切れ……？

「ゴミだろうが！」

ゴミ……？

「てめえら……助かると思ふなよ……！！」

こいつらは鉄くずだと言った、私の大切な家族を

こいつらは紙切れだと言った、私の大切な家族が守ってきたものを

こいつらはゴミだと言った、私の大切なものを……全部！

「フェンリル！」

「どうし……！た……」

フェンリルは出てきてすぐ回りを見渡した

そして私の目線、状況、私がにらんでいる相手  
それをみてすぐに自分がすべきことを判断した

「マリク……やるぞ……」

「あたりまえだ……！」

「貴様ら！王国軍に逆らうか！」

「黙れ！」

フェンリルと声が重なる

「てめえらはしちや行けねえことをした……！」

「私達の家族を鉄くずだと……ゴミだといった！」

「てめえらだけは許さねえ……！」

フェンリルは目の前に居る数人の兵士に飛び掛り、私は魔法陣を描く

「ガルルルルアアアアアアアアアアア！」

フェンリルの雄たけび

その雄たけびには、怒りと、悲しみに満ちていた

「あああああああああああ……！」

それは私も同じだった

私も魔法を放ち、咆える

怒りを、悲しみを込めて

「うわあああああああ……！」

兵士達は吹き飛び、壁にたたきつけられた  
しかし、私達は攻撃の手を緩めない

「ガアアアアアア!!」

フェンリルは何度も兵士達を蹴り、噛みついた  
私は何度も魔法陣を描き、兵士達に放った

その私達の目に浮かぶのは涙だった  
大切な家族を守れなかった悔しさ  
大切な家族を奪われた怒り  
大切な家族を失った悲しみ

その全てをぶつけた

「はぁ……はぁ……」

気がつくところにあるのは赤い液体で染まった鉄くずと、同じく赤  
で染まったフェンリルと私があった

「ミディー……」

私はもう一度ミディーが置かれていたほうを見た  
そこにあるのは変わらず壊されたミディー  
鉄の山の上にミディーの頭部が乗っていた

「フェンリル……」

「なんだ……」

「旅に出よう……」

「ああ……」

なぜ王国軍がこんなことをしたのか  
なぜここが狙われたのか

なぜミディーがこんなことにならなければいけなかったのか  
そして……

「ミディーの敵を討つために」

その日、この地下は閉じた

入り口だけ閉じた

いつか、帰ってきてミディーに迎え入れてもらうために

「ミディー、しばらくのお別れだ」

ミディーに別れを告げ

旅の仕度をするために元いた村へと向かった

そして深夜

「ただいま……」

「おお！マリク！お前今までどこで……！」

ニコじいは驚いていた

無理も無い

今までどこに言ったかもわからなかった家族が血まみれで帰ってきたのだから

「ニコじい。私は旅に出ることにしました」

「これまたなぜいきなり……」

「敵を討つためです」

「敵？」

「はい実は」

私は話した

森で家を見つけたこと

そこにいたミディーのこと

フェンリルとであったこと

そしてミディーとフェンリルとすごした楽しい日々を……

「……わかった」

ニコじいは話を聞いた後すぐにそういった

「ただ、1つ伝えねばならないことがある」

「なんですか？」

「わしは……若いとき王国に使えておった」

「「！？」」

ニコじいが王国に……？

「そしてわしはとある戦である光景をみた」

ニコじいの目には悲しい光が宿っている

「そこには村があつた

わしはその戦になるまえに、その村に来たことがあつた  
しかしその村はいままで見てきた村ではなかった

そこにあるのは子供の泣き声、人の死体、壊された家  
わしは知つた

王国は人を人とは思っていない  
人をただの金を集めるための、自らの欲のためにある道具だと思つ  
ていることを」

ニコじいはそのまま話し続けた

王に人々の声を伝えたこと

それを聞き入れてもらえなかったこと

さらに王国を追い出され犯罪者にされたことを

「そしてわしは崖に追い詰められた

王国の兵士は槍を構えて少しづつ近寄ってくる

そしてわしは足を滑らせて崖から落ちた

下は岩場

まず助からない

だがわしは生きていた

王国の兵士達は落ちたわしを見てこういった

あれは死んだな、にしても虫みたいにつぶれてやがる、と……

その兵士達はわしが王国に居た頃の部下、共に戦場を駆けたなかま  
じゃった……

しかし、敵となった瞬間わしを見る目がゴミを見る目へと変わった

あいつらは悪魔じゃ、齒向かうものを追い詰め、殺す」

ニコじいと言いたいことはなんとなくはわかりました

「ようするにいくなと?」

「できればそうしたほうがいいじゃろ……」

「それはできません」

「なぜじゃ!」

「私達は王国の兵士を殺めました  
いずれ王国は私達を殺しにくる  
そうなればこの島に危険が及ぶ」

「そうか……」

なら、すこし顔を貸せ」

言われて私は顔を貸す

（スッ）

ニコじいは私の目に手をかざす

（ズキッ）

その直後、目に激痛が走る

「ぐっ!」

「これでいい

今お前に力を託した

わしは王国に居た頃は魔法も使っていたからのお  
わしの魔力を渡した

これでお前の魔法はより強くなるじやろう

わしは魔法を使えんようになるが……

ま、わしには魔法などいらんじやろ」

「ありがとう、ニコじい」

「いいんじゃないよ

どうせ老い先短いんじゃない」

「縁起でもないこと言わないでくださいよ!」

「悪い悪い

まあ今日は止まっていきなさい

明日旅立つといい

じゃあの」

「はい、おやすみなさい」

ニコじいは奥の布団に体を潜らせた

「不思議な人だな……」

「やっぱりそう思いますか?」

本当に不思議な人ですよ

その日はニコじいの家で眠り  
明日旅立つことにした

次の日、早朝

「じゃあ気をつけての」

「はい、行ってきます」

ニコじいに別れを告げ

この島を後にする

はずだったんですが……

「船がないんですよえ」

「用意してなかったのか……」

フェンリルにつっこまれる

「しかし村の人に借りるのはあれですし  
今から作るとなると時間が……」

仕方ないですね

「一度あの家に戻って船を持っていきましょ」

「あるのか？」

「はい、確かミディーが奥にいてあると言っていた筈ですから」

「そうかミディーが……」

す、少し暗くなってしまいましたね……

「と、とりあえず行きましょう!」

少し早足で入り口を閉じた家へと向かう

さて……と

「では入りますか」

入り口は石のスライド式なので簡単に開けられるんですね

「なんかもう少し後で戻ってきたかったな……」

フェンリル、それは言うてはいけません

「さて入りますか」

中に入っていく

相変わらず荒らされている部屋

この奥に船があるはず

「さてフェンリル  
行きましょうか」

「ああ」

そして奥へと進んで「お帰りなさい、どこに行ってたんですか？」  
え……？

「ミ、ミディー……？」

「はい、どうしました？」

「なぜ……？」

「あれ？自動修復プログラムが入ってるって言いませんでしたっけ？」

そんなこと聞かされてません  
初耳です

「「ミディー……！」」

「え？なんで怒ってるんですか？」

「「そこに座れ！」」

説教タイムです

「ああ、はい、わかりました」

「まったく！戻ってきたからいいものの！」

「戻ってこなかったらそのまま王国を潰しに行っていたぞ！」

「あ、そんなに私のこと思ってくれてたんですね  
うれしいです」

「「う……」」

笑顔

なにか……怒る気がうせました……

「まったく……こちらは人を殺めてしまったというのに……」

「誰を殺めたんですか？」

「それは王国の兵士の方を……」

「治しておきましたよ？」

え？

「え？でも、鎧が真っ赤に染まってぐちゃぐちゃに……」

「はい、なっていました」

しかしまだ息はあったので治しておきました」

「なぜそんなことを！」

あいつらはあなたを壊して私達を殺そうとしたんですよ！？」

「でも、放っておけばマリク様が人を殺したことになるってしまいますよ?」

う

「それにこの島にも迷惑がかかります  
あの人たちは治した後記憶を消して海まで連れて行って目が覚めたところを王国に転送しました  
なので私達ではなく、私が島に着く前に飛ばしたことになるはずです」

そこまで気を使ってくれてたんですか……

「なにか……自分がバカに思えてきました……」

「俺もだ……」

「でもやっぱり私がこの島に居ると皆さんに迷惑がかかりますからねえ……  
ついてきてくれますか?」

はあ……まったく……

「そんなの決まってるじゃないですか」

「もちろん、地の果てまで共に行ってやる」

いやそこまでは……  
まあ、いいですけど……

「じゃあ行きましょうか！」

「でもなにで行くんですか？  
やっぱり転送ですか？」

「いえ、船です」

「え？でも潮風が苦手って……」

「なに言ってるんですか

私のスペックなら潮風くらいなんともありません」

「でもクラーケンのとき「じゃあ行きますよー！」もついいです…  
…」

悲しみは消え

怒りも消え

今は楽しい気持ちで一杯です  
でも……

「やっぱりミディーを壊したのは頭にきますね？」

「だな」

「私もできれば殴りたいですね  
その王国の王様を」

意外と物騒ですね……

「じゃあ王国に向かいますか！」

「おう！」

「はい！」

こうして私達のたびは始まりました  
悲しい別れ、寂しい夜、そしてうれしい再開  
そしてなぜかそれらの矛先は王国へと向き  
私達は王国へと旅にでることにしました

そして海の真ん中で

「そういえば場所はわかるのか？」

「え？それはミディーが兵士達を転送したんですからミディーが…  
…」

「いえ、私は近くに町に転送しただけですよ？」

「「「と、言うことは……………」」」

場所がわからない……

「まあ、探せばありますよね？」

「そうですよね！」

「まあ、その内つくだろう！」

先は……長い

#### 第四話 大切なもの、そして旅立ち（後書き）

そんなわけで旅立ちですw

もう少し後でミディー復活させたほうがよかったかな？

少し笑いが入った気もしますが

この位しないと暗くて暗くて仕方が無かったんですよ  
許してください！

ではまた次回！

## 第五話 王国の裏（前書き）

今回も短めですが……

6000文字とかは多すぎて書ききれないのでこれからはいくぶん  
じぶらの4000文字を目標にします……  
ではどうぞ

## 第五話 王国の裏

海の真ん中王国がある大陸へと向かい進んでいた時

「そういえばミディー」

「なんですか？」

どうしても聞きたいことが1つあったので聞いてみることにしました

「ロスト・マジック 古代の魔法ってなんですか？」

「ああ、あれですか……」

簡単に言つと昔王国で発見、使用されていましたが、危険なために封印された魔法です

少しそのときの資料があつたんですが読めなくなりましたね

私のメモリを頼りに保存しておいたんですが……今となつては一緒ですね

戻れませんし」

そうですか……」

「残念ですね

その資料に目を通したいですが、無いなら無理ですからね……」

「私が覚えている限りならお話できますがどうしますか？」

覚えてるんですか……」

すごいですね……」

「お願いします」

「では……」

昔王国では魔法の開発を行っていた

その中に危険な魔法が幾つか存在した

その魔法は術者にリスクが伴い、非常に危険なため封印された

その中には召喚魔法や防御魔法、回復魔法など様々なものがあり

その全てがその種類の魔法のなかでずば抜けた性能を誇っていた

しかし、危険があり、とても連続で使えず、中には死人も出たため、

ロガルディア？世が封印

使用を禁止した

しかし、全てを封印しきれたわけではなく、今でも幾つかの古代の

魔法は使われているらしい

封印された古代の魔法はロガルディア？世以外に知る者はおらず

古代の魔法は少しづつ忘れられていった

ロガルディア？世は死の間際にこう残した

『我が死後、もし我が子孫がかの魔法を悪用しようとするものが出

れば、この世に救世主が現れ、かの魔法を持ち、王国をただすこと

願わん』

ロガルディア？世は生前古代の魔法に関する情報を何者かに伝えた

という情報があり、何者かが古代の魔法を探し始めた場合、多数の

死者が出る恐れがある

これが私のところに回ってきた情報ですね」

「そうですか……」

古代の魔法は禁忌の魔法で術者にリスクが伴う……

そしてそれを今、現王国が探している……

今の情報から考えれば多数の死者が出るみたいですね……

そしてそれを止めるためには古代の魔法ロスト・マジックが必要……

もしかしてロガルディア？世は誰かが間違いを正そうとするときにそれを全うできるために――古代の魔法を解く方法を残してるんじゃない

……

「ロスト・マジック  
古代の魔法……」

私達でも手に入れられるでしょうか？」

「わかりません

私達のネットワークを使えば場所、封印の解き方などわかるかも知れませんが……

あいにく今は設備が無いので近隣のものとしか更新できないんです

……」

「そうですか……」

今この近くに誰かいますか？」

「残念ながら……」

そうですか……

とりあえず王国に向かう前にどうかして古代の魔法ロスト・マジックを手に入れなければ……

「そういえば現国王はこのことを知ってるんでしょうか？」

「おそらく知らないでしょう

現国王はまだ十代、正義感が強く、民への思いやりがあると聞きます  
そんな若者が襲撃を命令するとは思えません

おそらく、国王が若いのを利用して幹部あたりがたくらんでいるのではないでしょうか？」

そうなるとうにかしてこちら側に現国王を引き込めればいいんですが……

どうなるでしょうか？

（国王に会おうとする＞怪しまれる＞暗殺）

ダメですね

他の案を考えないと……

（民衆にまぎれて国王に近づく＞こっそり情報を伝える……）

そうなるともし国王があちら側だとかこちらが狙われますね……  
そうなる……

（民衆に扮して手紙を書き反応を見る＞こちら側についてくれそうなら情報を伝える＞最低こちらにはつかなくても情報を漏らしたりはしない）

これで行きますか……

まあ反応が良好でもあちらがわの可能性もありますが……

「そついえばミディー、そのほか関連する情報はありますか？  
たとえばロガルディア？世とかの情報は」

「あつたんですが……残念ながらメモリから削除されています  
情報は無いですね……」

「そうですか……」

とりあえずどこかで情報を入手しないと……

数日後、やっと大陸に到着しました

「ではとりあえず回りの偵察をしますか……  
フェンリル」

「わかった」

フェンリルはスピードが早いので偵察にも向いています

「村があつた

あそこならしばらく情報収集したり食料を確保したりできると思うぞ」

「さすがですね  
フェンリル」

「ふん、ほめられてもうれしくない」

照れてますね  
顔が少しにやけてます

「じゃああの町に行きましょうか」

「そうですね」

町に着きました  
なかなか活気がありますね

「皆さん楽しそうですね」

「そうですね、私はマリク様以外の楽しそうな人を見たのは久しぶりです」

「そんなに寂しい生活だったのか？」

「はい、ずっと1人でしたから寂しかったですよ

でも今はマリク様もフェンリルさんも居るのでとても楽しいですよ  
(ニコッ)

「マリク……」

「はい……」

( (絶対にこの笑顔を絶やさないようにしよう) )

2人は硬く決意した

「さて、とりあえず宿を探して、その後食料を確保しましょうか」

「そうですね」

「とりあえず宿を……」

目の前にありましたね……

「あっさりどころでは無かったですね……」

「そうだな……」

「ま、まあとりあえず宿は見つけたので次は食料を確保しますか」

「そうですね」

「どうでしたか？」

「ダメですね」

「こつちもだ」

どうやらこの村では食料を打っている店が無いようで、物々交換が基本らしいんです

そのため宿に止まるのもそれに見合うものが必要みたいです

とりあえずは……

「手分けしてなにか交換できそうなものを探しましょう  
そして夕方ここに集合」

「はい」

「わかった」

「あ、ミディーは私と一緒にいきますよ?」

「なぜですか?」

「私1人だと物の価値がわかりませんし、何よりミディーを1人に  
するわけにはいきません」

「マリク様……」

甘い雰囲気醸し出している2人の横でただ1人、フェンリルは

「……………（なんだこの空気）」

1人そこに入れずにいた

「俺はもう行く」

恐らく食料なら楽に交換できるし、俺なら毒があるかどうかなら匂  
いでわかるしな  
俺は食料を中心に集める」

そう言ってフェンリルは一番最初に出発した  
この空気から 逃げ出した

「では、私達も行きますか」

「そうですね」

この2人を見た人はこう証言した  
まるで新婚カップルみたいだと

さて、どこに探しに行きましょうか？

「どこ当たりがいいですかね？」

「このあたりの土地の情報ならありますが？」

さすがですね

「ところでメモリからどういう情報を消してるんですか？」

「基本的に土地の情報、重要な情報、実際に目にした情報はしっかりと記録しています

人物や村、組織などは重要な情報で無い限り消去しています」

「メモリが少ないんですか？」

「いえ、あと約500000000000000000000000TBは残ってますよ？」

よく単位がわかりませんがかなり多いのでしょうか

「ではこのあたりで需要が高いものはなんですか？」

「そうですね

このあたりといいいますが、あの町は他の町との交流もさかんで宝石などの需要も高いみたいです

ね  
宝石ならすぐ近くの洞窟で取れますし、宝石にしませんか？」

「そうですね

ところでその洞窟には魔物はいるんですか？」

「居るには居るみたいなのですが……

そこまで強くはないと思いますよ？」

町の方々も時々行っているようですし」

「それだと宝石はないんじゃないですか？」

町の方がよくいくのなら……

「いえ、やはり魔物がいて危険ですし、それに子供は近づいてはいけない決まりがあるそうですから

そこまで採られては居ないと思いますよ？」

そうですか

なら安心です

「では行きましょう」

洞窟

中は少し湿っていて、肌寒いですね……

「ミディー大丈夫ですか？」

「私は機械ですし、防寒対策もしっかり施されています  
液体窒素を浴びても劣化はしませんよ」

液体窒素でもですか……  
なら安心ですね

「さて、どうやって探しますか？」

「置くまでいけば宝石が出ているんじゃないですか？  
それにこの地質は硬いので多少掘っても大丈夫でしょうから穴を  
掘って探してもいいですし」

「ならそれで行きましょう」

「では……ライト！」

ミディーは手のひらの上に魔力で魔法陣を描き、光る球体を打ち出した

「ミディーも魔力で魔法陣を作れるんですね……」

「はい、そういう魔力を組み込まれましたから  
ついでにマリク様の魔力を少し取り込んでいますので全属性の魔法  
が使えますよ？」

いつのまに取り込んでいたんですか……

「さあ、行きましょうか」

「はい」

「あ、それと……」

？

なにかあったのでしょうか？

「ここに出発する前に調べてみたら、今は殆どの魔法使いが魔力で魔法陣を描けるようですよ？」

それって私の特徴が1つ消えたって事じゃないですか……  
ただでさえ影が薄いと言われているのに……誰かに

「さあ、落ち込んでないで行きますよ」

「はい……」

少し沈んだ気持ちのまま奥へと向かっていきました

視点、フェンリル

「ふむ……あつちか？」

今は丘の上

風がよく通ってどの方向に何があるかわかりやすいからだ

「森か……あの中なら食料はいくらかあるだろう」

いくか……

そういえばマリクとミディーは大丈夫だろうか？

まあ、あいつ等なら大丈夫か……

「俺は俺の仕事に専念するか……」

少し胸騒ぎがするが……大丈夫だろう

視点、マリク

大分奥まで来ましたね……

「ミディー、魔力は大丈夫ですか？」

「まだ大丈夫です  
かなり残ってますよ」

「そうですか……  
無理しないでくださいよ？」

「はい、わかってます」

ん？

「何か光ってますね……あれでしょうか？」

「でも少し浮いてませんか？」

魔物の目だったらずいいですね……」

「はは……まさかそんなこと「ギシャーー!!」ありましたね……」

ミディーはライトを使っているので攻撃魔法は使えない……  
となると私だけですか……

「ミディー、少し下がってください」

攻撃は私に任せてミディーは防御に専念してください」

「え、でも……」

「いいから下がっててください」

それでもフェンリルと契約したんですよ？  
もう少し信じてください」

「……わかりました」

さて、あいては……

「蜘蛛ですかね？」

八本足で天井に張り付いてこちらを見ている蜘蛛らしき魔物

体は大きいのに洞窟が狭いのでギリギリですが……

（がさがさがさ！）

動きは俊敏

避けることはできませんし……

あれで行きますか……

「虫は火が苦手なはず！

なら！ファイアーシールド！」

ただの炎の盾ですが……

（ズン！）

「ギシャ~~~~~！！」

真正面から全力でぶつかった魔物はぶつかった部分がコゲ落ち、かなりのダメージを受ける

この魔法さえ発動すればミディーには危害は無いでしょう

「ファイアー・アロー！」

炎の矢を撃ちだし攻撃

怒った魔物はこちらに突進してくるが炎を盾に阻まれ逆にダメージを受ける

「今回は簡単に勝てそうですね」

「気をつけてください！

来ますよ！

あの魔物の名前はマザー・スパイダー！

身の危険を感じると猛毒を持つ蜘蛛を大量に生み出し、対象を毒殺する恐ろしいモンスター！

小さい蜘蛛には注意してください！」

それは……暗い洞窟だと不利ですねえ……  
しかし

「強化！」

炎の盾さえ強化して巨大化させればこちらにはこれないはず

巨大化した炎の盾の端は壁にめり込み、隙間無く守ってくれている

「これだと向こうには攻撃はできませんが、こちら側ならしばらくは安全でしょう

ミディー、早めに宝石を捜して戻りましょう」

「そうですね、そうしましょう」

穴を掘るのは初めてですが……

善処しましょう

## 第五話 王国の裏（後書き）

はい、次回は考えてはいいませんが次回あたりで古代の魔法に触れさせようかなと思ってます  
ではまた次回

## 第六話 神の力（前書き）

難産だった……

半月かかってしまった……

しかもこの後どうするかまったく考えていないから驚き

お願い！石を投げないで！陶器もだめ！

ではどうぞ

## 第六話 神の力

私達は洞窟での採掘を終えて、フェンリルと落ち合うため、森で探索魔法を使用して位置を探っていた

「どうですか？ミディー」

「うん……」

少し遠い場所まで行ってるんでしょうか？

この近辺には居ませんね……」

ミディーが使える探索魔法は半径1kmまで探索することができるらしいんですが、それで見つからないということはかなり探す範囲を広くしているみたいですな

「とりあえず一旦村に戻って食料を確保して宿にチェックインしておきましょう」

「そうですね」

視点変更、フェンリル

その時フェンリルは王国の兵士達に囲まれていた

「くつくつく……」

こんなところで伝説の魔獣にあえるとわなあ！」

「もっけもんだな！」

「こいつを捕まえてこいと王の命令だからな！  
悪く思ふなよ？」

くっ！王国の兵か！

「貴様等は王国の兵か！  
貴様等を動かしているのは誰だ！

現王か！」

「お？喋るのか？

こいつはいい！

王も喜ぶだろう！」

「質問に答える！」

「せっかくだから教えてやろう

現王のことではない！

今の王は王とは言えない

ただのお子様だ！

その後ろにおわす大臣様こそが真の王なのだ！」

大臣……

現王は白か……

なんとかしてマリクとミディーに伝えねば！

「おおっと！

逃げるつもりか？」

「逃がさねえぜ？

こっちには１００の兵が居るんだからな！」

くっ！一体どうする！？

ここをどうにかして抜けなければ！

「強行突破しかないか……」

視点変更、マリク

遅いですねえ……

「フェンリル……遅いですね」

「そうですね……なにかあったのでしょうか？」

嫌な予感がしますね……

「ちょっと探しに行った方がいいですかね？」

「そこまでしなくてもフェンリルは伝説の魔獣  
そうそう道に迷うことは無いんじゃないですか？」

「そういう発想があるんですか……」

ミディーは時々おかしいな回答をするから油断できませんね

「でもやっぱり心配ですね……」

「そんなに心配なら呼び出せばいいんじゃないですか？」

「え？」

呼び出す？

「マリク様とフェンリルは一応契約しているんですから、いつでも呼び出せるはずですよ？」

「ああ………そういえばそうでしたね」

ずっと外に出してすごしていたので忘れてました

「さて………出ですよ！フェンリル！」

魔法陣を描きフェンリルをこの場に呼び出す

が

「ガアアアアアア！」

「「え！？」「」

なぜか飛び掛る状態で出てきたフェンリルは

「アアア！あ？」

本気を出したときと同じスピードでこちらの方へ飛んで来（ドガア！）

月が昇り空が暗くなった頃、フェンリルが突っ込んできて荒れた部

屋を元どりに戻し終え、フェンリルになぜあの時あのようなことをしていたかを探るためその時の状況を聞きだしている

「と、言うわけだ」

フェンリルからなぜあの様な状況で出てきたのかを聞いてみたところ、どうやら王国軍に追われていたようですね

「フェンリルが襲われた理由はなんだったんでしょう？  
召喚獣にするのが目的だったんでしょうか？」

「たしかにスピードも速く、戦闘力も高いフェンリルが召喚獣としてもっていれば古代の魔法をロスト・マジック手に入れるのにも役立つでしょう  
しかし理由はそれだけでしょうか？  
他に何か理由が歩きがするんですが……」

ミディーと2人でフェンリルが襲われた理由を考えていると

「まさかあれが関連しているのか？……いや……そんなわけはないか……」

フェンリルが何かが引つかかっているようなそぶりを見せた

フェンリルはなにか心当たりがあるのでしょうか？

「フェンリル、どうしたんですか？  
なにか心当たりでも？」

「いや、心当たりというか……  
少し気になることがあるのだ……」

「気になること?」

なんでしょうか?

気になりますね

「その気になることは?」

「お前達に出会う少し前…あの山に落ちる直前のことだ

俺はあの山に落ちる直前に誰かに呼び出されていた」

「呼び出された?誰にですか?」

「わからない……覚えているのはその者が大切な存在で俺をあの山に落としたということだ」

大切な存在……

フェンリルとどんな関係だったんでしょうか?

気になりますが今はまだはつきりしませんね……

「その人は何かからフェンリルを守ろうとしたのでしょうか?」

「それもわからない……」

呼び出されたということとその者に落とされたということ、それと1つの詩しか覚えていないのだ……」

詩?

「その詩とは？」

「最後に、落とされる直前に聞いた詩だ

神の力は聖なる力、良き者が正しく使えば、その力は民を救う

神の力は邪なる力、悪しき者が欲望で使えば、その力は世界を壊す  
神の力は染まる力、使うものによってその姿を変える

神の力を手にするには、伝説の魔獣と共に試練を越えねばならぬ

しかし決してあきらめるな、神の力は人を選ぶが使う者は選べない  
良き者が手にしなければ、この余波闇で染まることとなる

正しき者が手にしなければ、使ったもののその身は滅び、この世に  
災厄が降りかかる

全てはそなたに託された、出来ぬそのときは全てを失う」

なるほど……

神の力…それがあれば王国にも勝つことができるはず……

もしかして王国が探している古代の魔法とはこれのことでは？  
ロスト・マジック

に、しても

「よく覚えられましたね……」

「なぜか頭から離れないのだ

頭に焼き付いているように何度も頭の中で繰り返される、聞いたの  
は一度だけなのだがな……」

それも魔法なんでしょうか？

今の話を聞く限りは早く手に入れなければいけません……

「それを聞いた限りでは一刻も早くその神の力を手に入れるべきで

すが……」

「？なにを迷っている？」

「それを探すとするとフェンリルまで危険にさらすことに……」

やはりフェンリルを危険にさらすわけにはいきませんし

それが古代の魔法だロスト・マジックったとしても、他の古代の魔法を探せばいいわけですからフェンリルをわざわざ危険にさらさなくてもいいのではないでしょうか……

「俺が危険にさらされる？」

そんなことを気にしているのか？」

「え？でも……」

「俺はお前と共にしばらくの間過ごしてきたが……俺はそこまで信用されてないのか？」

安心しろ、捕まりそうになっても逃げる方法ならいくらでもある  
それより、放っておけばもっと恐ろしいことになるのではないか？  
俺としてはそちらのほうを阻止すべきだと思うがな？」

フェンリルの言うことはもつともです  
しかし……

「しかしそれが古代の魔法だロスト・マジックったとしても他にも古代の魔法はあロスト・マジックるわけですし……」

「その他の古代の魔法が神の力に劣っていたらどうする？  
王国が手にすればこちらが負けるのは確定する」

いくら古代の魔法があってもかなわなければ意味がない  
俺はそちらを優先するべきだと思うぞ?」

フェンリルは一度言い出したら聞きませんからねえ……

「……わかりました……」

ただし、危なくなったら絶対に逃げてくださいよ?」

「わかっている」

「マリク様、いいのですか?」

「いいんですよ」

それに、一度言い出したら聞かないでしょう?」

「そうですね……」

もうこれで後戻りはできませんね……

元からそうですが……

「とりあえず今日は寝て、明日からその神の力を探しましょう」

「そうですね、おやすみなさい、マリク様」

「おやすみなさい」

その夜

「なあ、マリク……」

「なんですか？」

「いや…なんでもない……」

フェンリルは1人嫌な予感がしていた

そしてそれはそう遠くないうちに現実の物となるのだった……

## 第六話 神の力（後書き）

時間がかかった割には文字は少なく内容も意味 不明な状態になっ  
ていますが  
受験勉強によつて頭の容量があいていないので勘弁してください  
ではまた！

次の話はいつになるかなあ……

## 第七話 森の魔女（前書き）

送れましたあ！

さあせんつしたあ！！

でも別にこだわったとかそういうのは特にはないです。すいません  
あとまたコメディーが入ってしまったような……

でもこれぐらいしないとどうも書き辛い……

なので許してください！

ではどうぞ！

## 第七話 森の魔女

次の日

私たちは村を出て、神の力と古代の魔法ロスト・マジックの情報を探しはじめました

近くの町に向かうため、森の中を進んでいます

魔物は比較的少なく、色々な植物があり、それをエサとする動物もたくさんいます  
ですが……

「……………」

「……………」

「……………」

この通り無言が続いていて少し辛いです……

「ミディー、疲れませんか？」

「大丈夫です  
機械ですから」

「熱を持つと動きが悪くなると聞きましたが？」

「まだ大丈夫です  
冷却機能がついてますから」

「そうですね」

フェンリルは大丈夫ですか？」

「大丈夫だ」

「そうですか」

「疲れてるはずなんですが……」

「とりあえず話は続きませんでしたね……」

「無言の空間ってこんなにつらいものなんです……  
改めて実感しました」

「マリク様、あれを」

「え？」

「ミディーが指差した方向を見ると……」

「小屋……ですね……」

「誰かいるんでしょうか？」

「いつてみよう」

「フェンリルが小屋に向かって歩き出したのに私達も続いていく」

「すみません！誰かいませんか？」

「小屋に誰かいないか声をかけてみる」

「…………留守みたいですな」

「どうでしょうか？」

出発直後にああいうことがあったのでお邪魔したいんですが……

「じゃあ出発しましょうか」

朝、起きたあと直ぐに仕度をして村を出ようとしていました

「少し待つてください」

ミディーはシーツを綺麗に元に戻しています  
フェンリルは既に外で待っています

「じゃあ外で待っていますから、終わったら直ぐに来てくださいね  
？」

「はい、わかりました」

部屋にミディーを残し、外で待っているフェンリルの元へ行きます

「ミディーは？」

フェンリルは早く行きたいようで私を見た瞬間に質問を投げかけて  
きました

「部屋を整理しています」

「そんなことなくてもいいのではないか？」

「さすがに毛だらけじゃでてこれないでしょう……」

実はフェンリルがベッドを使ったのでベッドが毛だらけになってしまい

ミディーはそのままだと迷惑がかかるから、と掃除を始めました  
もう毛は全て取り除きましたがミディーはそういうのはきっちりやる性格なので……

「毛など放っておけばいいだろう」

「よくないでしょう……」

「お待たせしました」

「やっときたか……いくぞ」

ミディーが来たのを見たフェンリルは直ぐに歩き出しました

「私達もいきましようか」

「いくしかないでしょう」

「呼び戻せますか？」

「そうでしたね」

そんな会話をして村を出た直後

「お！そのフェンリル！！」

「フェンリル、お知り合いですか？」

「思い出したくないような汚い顔だが、王国軍だ」

「ではどうしますか？」

「やはりここは……」

「」「軽く蹴散らすとしましうかねえ？」」「」

そのときにアッサリ倒せはしたんですがかなりの量だったので疲れ  
てしまい、どこかで休もうと思っていたところでついたんです

「少し上がって安ませてもらいましょう」

「無論、そのつもりだ」

フェンリルはずかずかと上がりこんでいく

「ああ！フェンリル！足ぐらい拭いてから入らないと！」

「そんなもするか！」

フェンリルが逆切れした直後

「お前等人の家で何をやつとるんじゃあ!!」

後ろからこの家の持ち主のおばあさんあろうつ人の怒鳴り声が聞こえた

「ああすいませ!……ん?」

振り返つてみるとそこには……

「誰も……いない?」

「……じゃ……!」

「え?」

いのししがぶら下がった棒を持つ女の子がいた

「……うえええええ!!?」

私とミディーは予想外すぎたのと驚きで変な声を上げてしまい

「なんだ騒がし……えええええええ!!?」

家の中からでてきたフェンリルも同じように驚いていた

「ふむ、なるほどのう

このごろの王国の動きが怪しいと思っておっいたらそんなことをしとつたのか……」

おどろいたあとこの人の一括で正気に戻った私たちは家に上げてもらい、

なぜ家に上がろうとしていたのかを話しました

「それは大変だったじやろう

この家は狭いが、ゆつくりしていけばいいよ」

「あ、ありがとうございます

あの…お名前は……」

「わしか？わしはマジョカ、美人魔女四姉妹の長女じゃ」

「び、美人……」

どこからどう見ても7〜8歳ぐらいにしか見えないんですが……  
言ったら怒られそうなので控えておきましょう

「で、マジョカさんはなぜこんな所に住んでるんですか？」

「わしら姉妹は元々王国に使える魔道士だったんじやが……  
とある一件で国を追われたんじや」

「国を追われた？なぜ？」

「そうじゃなあ……あれは数年前のことじゃった……」

そういつてマジョカさんは懐かしそうな顔をして話し始めました  
数年前という単語には反応しないことにします

「わしはその時複数ある魔道士部隊のうち1つの隊長をやっておっ

た……」

「マジヨカ姉ちゃん！」

「ん？どうしたんじゃ？」

「実はまたやつちゃって……」

「はぁ…またか……つれて来い、わしが治してやる」

「ありがとう！」

この子はマジヨコ、

わしら四姉妹の末っ子でよく魔法を失敗して自分の部下を動物に変えておる

それでもわしと同じように部隊の隊長をしている理由はその魔力と威力にある

一度本気で怒って魔法を放ったときは自軍の砦を守っているにもかかわらず砦を半壊にした

しかも一発でじゃ

じゃが治癒や解呪は苦手であんなにできないからわしがよく動物に帰られたあいつの部下を元に戻しておった

「じゃあ私連れてくるね！」

「人にぶつかっても魔法を放っちゃダメじゃぞ」

「あらあら、姉さんはマジヨコの世話が大変そうねえ」

マジヨコが走っていくのを見送ったわしの後ろから声がした

「マジヨミか……」

「あら、自分の妹にあつたのに随分じゃない？」

この者はマジヨミ、わしら四姉妹の次女

「お前がストーカーみたいに付きまとうからじゃ……」

「あらそんなことないわよ？」

「じゃあ今日は何をしておった？」

「姉さんをつけて写真を取ってたわ」

「昨日は？」

「姉さんの隊にいつて色々話を聞いてたわ」

「一昨日は？」

「戦場に向かう姉さんをつけて行ってたわ」

「完全なストーカーじゃろうが……！」

このようになぜかわしの後をつけてくるわけの分からん妹じゃ

「ん？また姉さんが何かやらかしたのか？」

「あ、マジヨラ、なんだか久しぶりねえ」

「そりゃあ今の今まで遠征いつてたんだから久しぶりだろ……」

この者はわし等四姉妹の三女、マジヨラ、

わしの次に魔法が得意でよく遠征のメンバーに加えられる

わしが遠征のメンバーに入れない理由は……わしが四姉妹でも  
つとも解呪が得意だからじゃ

あとは聞くな

「あ、そうだ、部隊の人がマジヨミ姉を探してたぜ？」

マジヨミねえは隠密部隊の隊長なんだからしつかりやないと」

「ええ、私部隊にいるよりも姉さんの近くにいたほうが好きなの  
にい」

「それアウトだろ……」

マジヨラは基本的にツッコミ役で、こいつがおらん間わしは地獄を  
味わう

妹2人は酷い天然＆ボケなのでな……

「マジヨカお姉ちゃん！つれてきたよー！」

「ゲコッ！」

「おお、マジヨコ、ほれ、こっちにつれて来い」

「うわっ！またやったのかマジヨコ！？」

「仕方ないじゃない！この人が私の胸を借りたいなんてセクハラ発言してきたんだから！」

「いや…それ稽古つけてくれっていったるようなもんだから……」

「え？そうなの？」

「うふふ、マジヨコはすっかりやさんねえ」

まあこんな感じで四姉妹そろつと基本的に騒がしくなるのがわし等なんじゃ

「ほい、治したぞ。さっさと隊にもどれ」

「す、すいません……」

わしは元に戻した兵士を自分の隊に戻るようにいい、自分の隊に戻ろうとした

「あ！そつだ！お姉ちゃん達！！」

「ん？どうしたんじゃ？」

「王様が呼んでたよ！四人で来いって！」

「」「王様が？」「」

「なにかようでしょうか？王様」

「おお、来たか、実はそちららを呼ぶように大臣に言われての」

王様はほんとお元気で、  
威厳もあつたが大臣に少し頼っているところが少しダメなところじやつた

「そうですか…で、大臣は？」

「おお、そういえばまだ来とらんな……」

まったくこの頃の大臣はわしの言うことは聞かずに一体どこに……  
うっ！？」

「王様！？どうされました！？」

「う…うおおおおお！！」

（ドサッ）

王様はそのときに死んでしまった

死因は毒殺、犯人はわし等四姉妹と断定

そしてわしらはばらばらに国のあちこちに逃げた

「それから数年、わしら四姉妹はまったくあっていない……」

無事かどうか分からん……………」

「……………」

マジヨカさんの話を聞いた私たちはしばらくの間無言になった

その中でフェンリルが口を開いた

「で、そのお前の妹たちは強いのか？」

「フェ、フェンリル？」

「ああ…強い…おそらく今のだらけきつた王国なら四天王にも匹敵するじゃろっ」

「四天王？」

「なんじゃ？知らんのか？」

王の側近にとてつもなく強い四人の魔道士がおるんじゃ  
その者たちは四天王と呼ばれ、王がいない間の権限を握っておる」

「なるほど、ならばその妹達を探しに行くぞ」

「「ええ！？」」

「そのフェンリル、確かに妹達は強い…しかしどこにおるか分からんぞ？」

「それでも探すしかないだろう  
俺たちじゃあ明らかに戦力不足、誰かの助力が必要だ

だがここにいるのは小さい女の子、その四人にしか望みは託せないだろう」

「フエ、フェンリル…？」

「なんだ？別に手伝ってもらうぐらいはいい…だ…ろっ…」

「誰が小さい女の子だってえ…？」

弱つちい犬っころがあ…

なめるなああああああああ！！！！！！」

「「「うわああああああ！！！！！！」」」

その日、近くの村の人は森に炎の柱が上るのを見たという

「ふむ…ちとやりすぎたかの？」

そこには焼けた何かと黒焦げの人型の何か、そして動物のような形の何かがあった

「生命反応は…ギリギリあるの

2人が限界じゃが…一人はロボットのようじゃし大丈夫じゃろっほい！」

そこに立つ一人の人影は二つの何かにさわり魔力を送り込む

「「「ゲホッ！ゲホッゲホオ！！ケヒュ〜ケヒュ〜……」」」

そして府樽の何かは元の形を取り戻し、息を吹き返した

「生きとるな？ならいいわい」

「殺すきかぁ！！」

「死んだと思いましたよ！？

……あれ？ミディーは？」

ミディーの姿が見えませんか……

ロボットなので大丈夫だと思っていたのですが……

「ん？ああ、そこじゃよそこ」

マジョカさんが指差したほうを見ると

「え？……ミディー！！？」

黒焦げになったミディーらしきものが横たわっていた

「なんででしょうか？修復中なので静かにしてほしいのですが」

「あ、すいません……」

だ、大丈夫ではあるようですね……

「どうじゃ犬ところ？」

「わしも強いじやろ」

「やりすぎだ！」

周りを見ても！

真っ黒にこげているではないか！！」

私がミディーに駆け寄って話しかけている間に2人は喧嘩をしている

「まあよいではないか、この森の下には魔力の脈があるから数日後には戻るじやろうしな

それよりどうじゃ？わしをつれていかんか？」

「お断りだ！危なくて連れて行けるか！！」

「そうか…残念じゃのう…妹達の場所も分かったかも知れんのにのう……」

「え？さつきはわからないって……」

「ああ、1つだけあるんじやよ、場所をしる方法がな  
まあ大体しか分らんが……近寄れば近寄るほど明確になるじやろうて」

「どういうことですか？」

「わしらはもし見つかったときのために分かれて逃げた  
そのときに互いの魔力を感知して、

できる限り見つかったても互いのところに被害が及ばないように離れて隠れることにしたんじや

その魔法を使えば、向こうが警戒さえしていなければ会えるじやろう  
まあ今は殆ど東西南北程度しか分らんがな  
どうじゃ？わしをつれていかんか？」

「もちろんです！」

むしろこっちからおねがしたいほどです！  
フェンリルもミディーもいいですね？」

フェンリルとミディーがいるほうに向かって言う

「俺はお断りだ！」

いくら戦力になっても鬱陶しいだけだ！」

「でも誰かの力を借りなければならぬのは事実でしょう」

「ぐっ！」

フェンリルは仕方なくといった感じで了承してくれた

「ミディーはどうですか？」

「修復中なので話しかけないでほしいと思ったと思うんですが？」

「すみません…ではいいということですよね？」

「はい、マリク様が決めてくださってかまいません」

ではいいということでは

「ではミディーが回復したら早速探しに行くことにしますか！」

「その必要はないぜ！！」

「え？」

声<sup>が</sup>した方向には三つの人影<sup>が</sup>あ<sup>っ</sup>た

## 第七話 森の魔女（後書き）

三つの人影の正体はいかに！？

妹さん達だといいですね！

敵だと厄介なことこの上ないですし……

ああ！今から次の話を書くのが面倒だ……

でも頑張って書きます！

待っててくださいね！！（ビシッ）

マリク

「ならもうちよっと書く量を増やしたほうが「黙ってるやあー!!」  
はい……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0112v/>

---

とある科学の魔法論理

2011年10月29日19時12分発行